

作物名：トマト

病害虫名：すすかび病（病原：*Pseudocercospora fuligena*）

## 1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉に発生する。初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。病勢の進展に伴い病斑は拡大し、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形となり、灰褐色～黒褐色に変わる。葉の表面には裏面よりやや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑を生じ、かびを生じるが裏面に比べて少ない。
- 被害葉は早期に垂下し、乾燥巻縮して全葉が濃緑褐色のかびで覆われる。
- 感染から病斑が現れるまで2週間以上かかり、低温時では3週間かかることがある。
- 病徴は葉かび病に類似しており、肉眼での判別は困難なため、診断には顕微鏡による分生子の形態観察が必要である。総合倍率100倍程度の小型顕微鏡があれば現地診断が可能である。
- 本病菌の分生子は棒状で大きさはさまざま（縦径13.3～170.3 $\mu\text{m}$ ×横径2.7～5.6 $\mu\text{m}$ ）であり、分生子が楕円形、樽形の葉かび病と容易に区別できる。
- 発病は下位～中位葉に留まり、葉かび病に比べ上位葉への進展は少ない傾向がみられる。
- トマト品種の葉かび病耐病性の有無にかかわらず発病し、葉かび病と混発することもある。
- 葉かび病は着果負担による草勢低下や肥料切れの状態で発生が助長されるが、本病は高温時期や着果負担が少なく草勢が旺盛な場合でも発生する。



写真1 葉裏の病徴

## 2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。
- 被害植物の病斑上の分生子が、風により飛散し伝染を繰り返す。

## 3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属する。菌の発育適温は26～28℃、分生子の形成適温は18～22℃である。また、分生子の発芽適温は26℃前後である。
- 発病適温は18～28℃であるが、高温ほど発病しやすい。また、多湿条件を好むため、密植、過繁茂等によって通風が悪い環境では発生が助長される。

## 4 防除方法

- 多湿条件で発生しやすいので、密植、過繁茂を避け、換気による湿度管理に留意する。
- 発病葉や被害残渣は伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 病斑は主に葉裏に形成されるので、薬剤散布は薬液が葉裏に十分かかるよういねいに行う。多湿条件で発生しやすいので、密植、過繁茂を避け、換気による湿度管理に留意する。

## 5 出典

### (1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- 普及に移す技術第87号（宮城県）

(2) 写真

- 宮城県農業・園芸総合研究所撮影



写真2 葉表の病徴



写真3 すずかび病菌の分生子

(令和5年9月改訂)